

計 報

羽田明先生の御逝去を悼む

濱 田 正 美



京都大学名誉教授羽田明先生は、年余の御闘病も空しく、昨年十二月二十七日ついに長逝された。数年来ご健康をやや害され、ことに一昨年秋よりは入院加療の御身の上ではあったが、御体力を恢復なさりつつあると仄聞して間もなくの悲報であった。四半世紀近くも先生に親炙し御学恩を忝なくした身でありながら、雪中に遊び惚けて御葬儀にすら列しえなかった不肖の弟子には悲しみと恨悔は余りに大きく、哀悼のことばを捧げることさえ覚束ない。

羽田先生は1910年のお生まれで京都府立一中、第三高等学校を御卒業の後、東京帝国大学に進まれた。最初は京都帝国大学法科に在学されたが、のち東京帝大の文学部に転じられたと承る。大学御卒業後、1936年秋より満二年、フランス政府奨学生としてパリに滞在され、当時のフランス東洋学の大師たちの講筵に列せられ、特に東洋語学校のJean Deny教授に師事してトルコ学を修められた。先生は時に留学生時代を懐かしまれ、トルコ人教師が*Les sciences chez les Turcs*の著者というよりむしろ作家Halide Edipの夫君としてしられたAdnan Advar氏であったこと、御同学には若き日のB.LewisとD.Sinor両碩学がおられたことなどを折に触れて語られた。留学より御帰国の後、母校の第三高等学校に職を奉じられ、戦後は京都大学教養部教授を勤められたが、1970年文学部の西南アジア史コースが新たに学科となったのを機に文学部に移られ、73年3月の御退官に至るまで草創期の学科の充実に専心された。この間1964年にはパリ国際大学都市の日本館館長に就任され日仏の学術交流に多大の貢献をされた。

羽田先生は最初、いわゆるウイグル俗文書の研究を志されたが、やがて比較的早い時期に御関心を東トルキスタンの近世史へ向けられた。この分野における最初の御業績が「明末清初の東トルキスタン——その回教史的考察——」である。この論文はその副題からも明らかなように、ともすれば中国と周辺地域との交渉史に傾きがちであった従来のいわゆる「塞外史」とは本質的に異なる新たな境地を切り開いたものであった。わが国に

おけるイスラム化以降の中央アジアの研究はこの論文をもって本格的に開始されたといっても過言ではない。先生三十二歳のこの御業績は、我々後学のもの出発点であり、これを読み返す度に、我々は依然として先生が半世紀近い昔に示された枠組の中で右往左往しているに過ぎぬことを改めて思い知らされる。

その後羽田先生は、御関心の領域をジュンガル史、東西交渉史、そして就中トルコ族のイスラム受容の問題へと拡大され、常に刺激に富んだ数々の御論考を發表された。そのうち主たるものは、臨川書店刊「中央アジア史研究」に纂められている。先生御自身は、細微、精密な考証をむしろお好みになられたようであり、そのことは御絶筆となった東方学会創立四十周年記念論文集の「満州語解剖書研究序説」にも良く表れているが、我々には透徹した洞察と雄大な構想こそが先生の御学問の本質であったとおもわれる。例えば、オスマン帝国の「奴隸制度」をも包括的に説明可能な「トルコ族に固有の奴隸観」を、東突厥に関する史料中から抽出し、イスラム受容の前後を通じてのトルコ民族史の一貫性を示された「マムルークとカプックルラル」という御論考などを拝読すると、あたかも大空を飛翔する鷹が獲物を目がけて一直線に地平へと向かうのを見るような壮大な気分に襲われる。我々弟子どもは常に、「羽田先生の天翔ける構想力」と称して賛嘆するとともに、引き比べて、迷い迷い地上を歩まねばならぬ身の不敏を嘆いたものであった。

先生の洞察力はおそらく天賦のもので、研究中の問題などを少しお話し申し上げると、直ちに的確に問題点を指摘された。その意味ではまことに恐い先生であったが、実際には学生を叱責されることは決してなかった。先生はなかなかの毒舌家ではあられたが、人には常に寛容で、わけへだてなく心を配られた。なにかの集まりの折など、一人話題に加わらずに沈黙している人がいると、そちらへ話柄を向けられるのを常にしておられた。御退官後の御勤め先ではずいぶんご苦労なされたということも噂に聞いただけで、先生御自身は一言もお漏らしにはならなかった。先生の人に対する寛大さと公平さは、今の世にあって真に得難いものであったと、先生を失って改めて痛感される。

古代のトルコ族は死者の靈魂は鷹に化して天に昇り、天そのものと一体になると信じていたと思われる。先生の靈魂の果して天の一隅に留まって居られるなら、先生の飛翔の跡をたどる我々の地上の歩みを見そなわすよう心より祈るものである。